



Effects of bowel training and defecation posture on chronic constipation in older adults with dementia: a randomized controlled trial

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2023-04-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内藤, 智義 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/00004352

論文審査の結果の要旨

慢性便秘は、介護施設に入所した高齢者によくみられ、認知症の行動・心理症状（BPSD）と関連する可能性があり、それらは介護者にも多大なストレスを引き起こす。認知症高齢者は、排便習慣が確立できず、そのために直腸内での過度な便塊貯留が便意を鈍化させ、慢性便秘の悪循環を招く。この研究の目的は排便ケアが慢性便秘および関連する問題に及ぼす影響を調べることである。申請者は浜松医科大学臨床研究倫理委員会で承認を受け、認知症高齢者の慢性便秘の治療として、**bowel training** と排便姿勢を組み合わせた排便ケアを行う介入群と一般的に行われているケア（食事摂取の促し、下剤管理など）を行う対照群とを比較調査した。介入は 4 週間の前観察期間の後、8 週間連続で実施された。主要評価項目は自発的排便（SBM）と残便感のない自発的排便（CSBM）の週平均値とした。副次的評価項目は、便秘患者の生活の質（PAC-QOL）、便秘の重症度（CSS）、BPSD と関連した介護者の負担度（NPI-NH）であった。

30 人の認知症高齢者が介入群（n=14）と対照群（n=16）に無作為に割り当てられた。SBM は介入群において有意な増加を示さなかったが、CSBM は介入群において有意に増加した。CSBM の週平均値は、介入群ではベースラインの 0.53 回から 8 週間で 1.58 回に増加したのに対して、対照群では 0.56 回から 0.43 回であった（交互作用 $p<0.001$ ）。PAC-QOL、CSS、NPI-NH スコアおよび介護者の負担スコアは、8 週間の排便ケア介入後に対照群と比較した場合すべて有意な改善を示した。また重篤な有害事象の発生は見られなかった。

審査委員会では非薬理的介入により認知症高齢者の慢性便秘を効果的に改善することができ、また同時に介護者の負担軽減にもつながるという新たな臨床的な知見が得られたことを高く評価した。

以上により、本論文は博士（医学）の学位授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者

主査 杉本 健

副査 前川 真人

副査 山内 克哉